

## 光砥山（京都北山） 巨木群の山

ポンポン山雑感

2017年9月5日

三鍋敏郎

京都北山を50年近く徘徊しているが「光砥山」という名の山は知らなかった。隣に有名な「小野村割岳」があるので目立たない存在なのか。昭文社の登山地図「京都北山」にも山名の表示がないが、光砥山から南に流れ出る谷が「コウンド谷」と表記されているので光砥と書いてコウンドと読ませるのかもしれない。

広河原能見町から能見川沿いに1キロ東に進み橋を渡ると痩せ尾根が左手にある。小さな谷の奥にはP857mがありその山頂から時計回りに尾根が能見川に張り出しでいる。

いきなり厳しい登りの連続で息が切れる。斜面にはイワウチハの群生があり針葉樹のアスナロが多く見られる。尾根に乗ると障害もなく歩きやすい。標高700m辺りに小振りなブナが現れる。右手から大きな尾根が合流する800m辺りから杉やアスナロの巨木が目立ち始める。ふかふかの柔らかい尾根の散歩道を歩きながら、巨木を見るために右往左往しながら歩く。巨木に見慣れてくると感覚が鈍り多少の巨木では驚かなくなった。

標高点580mを越えると、下山予定の支尾根が左手前方に見えてくる。予定の尾根の下部にはP662mの表示があり能見町に向かって南に延びている。しかし尾根の始まるピークは地形図では特徴がなく不鮮明で等高線で丸く囲まれていないので、慎重に接近して、尾根の始まる位置に赤い包装紙を入れたビニール袋を木株に被せ、風で飛ばされないように大きな枯枝を重石代わりに立てかけて置いた。

下降予定地点から尾根の方向が北向きに変わる。相変わらず巨木が点在する。尾根上には幾つかの窪地があり、四辺形の白灰色の石の破片が辺りに散らばっている。光砥山という名前の起こりがこの石の破片にあるのではないかという妄想が湧いてきた。（見本を採取し、下山後面出しをして試したが硬度が高く研磨の最終仕上げ、光沢用か？）

国境尾根から派生する大きな尾根に合流し右手に進むとすぐに光溢れる山頂が見えてくる。山頂には針葉樹の太い枯木が天空に向かって真っ直ぐ伸び、上部に山名の表示板が掛けられている。山頂は東側に展望が開けて比良山方面の山が見える。

食事後、例の下降点まで引き返すと、目印のビニール袋の重しが落ちていた。風も強くないので、動物が袋の匂いを確かめたのかも知れない。光砥谷東尾根の尾根を下る。植林地が多いが不快感は無く快適な尾根である。自然林の雰囲気の良い場所もあり退屈はしない。P662mから少し東に尾根が振れるがそのまま下ると痩せ尾根となり、能見町の集落に出る。川沿いに咲くゲンノショウコなどの花を愛でながら登山口まで15分。

★メンバー 三鍋ほか1名 ★コース 登山口 8:50～857m 10:15 発 22～P856m 10:47 発 53～光砥山 11:30 発 56～下降点 12:17～P662m 12:50 発 54～道路 13:15～登山口 13:35